

勿凝学問 243

ミネルヴァの梟と政策論

『官僚たちの夏』の「確実な政策なんかどこにあります…」

2009年8月12日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

橋本裕志という脚本家の名前を覚えていくほど、日曜ドラマ『官僚たちの夏』は、城山三郎の作品と似ているようで似ていないのに、端々に気の利いたシーンと表現が織り込まれていて城山作品に劣らぬおもしろさがある。そして8月9日——風越たちが手がけた「全国工場再配置計画」への予算が付かなかったことに対して、須藤通産大臣に風越たちが詰め寄る。

庭野たち「説明してください大臣。なぜ予算がつかないのかまるで理解ができません」
須藤大臣「…効果が不確定だということだ。もっと確実な効果を望める政策が必要だという結論だ」

風越「…確実な政策なんかどこにあります。予測ができないから、われわれは日々議論を重ね苦悩しているんです。すべての政策は不安と手探りの中で実行されているものでしょう。資料や前例がほとんどない公害対策ならなおさらのことです。できる限りの手を打っていくことが我々の良心じゃありませんか」

うんっ？ これと同じ話を、僕は今年5月に、国家公務員1年生への初任行政研修で話した記憶がある。その時は、「ミネルヴァの梟は黄昏とともにようやく飛び始める」というヘーゲルの言葉——いろんな解釈があるが、人間の公務員研修所では、どれだけ賢い人でも未来のことは分からないし、真実はいつもすべてが明らかになった後にしか分からないと解釈——を持ちだして、我々研究者の仕事はミネルヴァの梟でいいかもしれないけど、官僚はそうはいかない。しかもみなさんは、情け容赦なく結果責任を問われることになる。では、官僚は、日々、いかなる訓練を行うべきか？という問題提起をしたわけである。

と言っても実際のところ、政策を論じる研究者も、「確実な政策なんかどこにあります。予測ができないから、われわれは日々議論を重ね苦悩しているんです」という風越の言葉を嘔みしめなければならない——そういうことを、「政策技術としての経済学を求めて——分配、再分配政策を扱う研究者が見てきた世界」『[atプラス](#)』に書いていたりもする。

政策判断には予測が必要である。すなわち、現時点から将来にわたり時間の推

移に応じて起こることへの予測、それをおこなう学問を動学というのであるが、そうした動学が不可欠である（50 頁）。

.....

政策判断には、時間の変化とともに推移する事態に関する予測、動学的な判断が不可欠なのであるが、経済学をはじめとしたほとんどの社会科学が、動学としての性格を帯びていないという本質的な問題がある。

さらには、計量経済分析の手法を磨き上げれば、適切な将来予測をおこなう力が身につくのかというと、残念ながらそうではない。データ処理というのは、所詮は、過去のデータを用いて、過去にあった傾向を読み取っているにすぎず、過去と未来とでは、我々が焦点を当てている変数のみならず、それを取り囲む諸変数も異なるのである（52 頁）。

.....

政策判断に本当は必須である動学の議論が目指すべき方向の先にあることは分かるのであるが、なお、政策技術の域には達しておらず、今後も政策技術として用いるにたる水準に達しそうにもない。経済学をはじめとした社会科学の方法論は、なお、これといってすっきりしたものは存在せず、「海千山千」「千軍万馬」というようなアプローチをとりながら直観を鍛えるしかないようなのである。このあたりをケインズは経済学者に求められる「理想的な多面性」という言葉で表現している(52 頁)。

ちなみに、同じく TBS 日曜ドラマ、『華麗なる一族』も橋本裕志氏の脚本による。その時は、次の文章を書いている。

勿凝学問 73 [華麗なる一族によるこの国の改革——インセンティブスキームとしての社会構造の破壊](#)

本日は以上。